

「幻視をみとめた右中大脳動脈閉塞の一例」

医療法人 聖志会 渡辺病院 稲山靖弘

医療法人 聖志会 ケアプランセンターわたなべ 村田智恵

【はじめに】幻視は、アルコール依存症の離脱症状、レビー小体病、脳血管性障害における後頭葉病変で見られることがある。今回、われわれは、右中大脳動脈の閉塞による高範囲の脳梗塞の結果、幻視を認めた一例を経験したので若干の考察を加えて報告したい。

【症例】60才台、女性

【初診時主訴】蛇がみえる

【既往歴】心房細動

【家族歴】特記すべきことなし

【生活歴】高校卒業後事務系の仕事、結婚後は家事

【現病歴】数年前から心房細動を指摘され、近医にてワーファリンの投与されていた。X-1年、胆嚢炎の内視鏡手術をうけた際ワーファリン中止。手術後右中大脳動脈の閉塞による脳塞栓を認め加療をうけたが、左半身麻痺が残った。X年4月から、介護する夫へ物を投げ、大声で叫ぶようになった。また「男がはいつてくる、蛇がみえる」というため、当院外来受診

【初診時所見】左半身麻痺を認める。訴えの中心は、「蛇、サソリが見える」「家族に馬鹿にされる、信じてもらえない、悲しい」であった。

【検査所見】HDS-R：24、SDS：60、立体図模写：不正解、頭部CT：右中大脳動脈領域の梗塞、脳SPECT：右大脳半球の著明な血流低下

【治療経過】本人と家族に対して、幻視は右半球の梗塞の影響であることを説明した。家族に対して自殺念慮を含めた抑うつ状態にあり、励ましや批判でなく受容的に接するように伝え、また右半球損傷による左半側空間無視も認められると説明した。その後、本人は、医師の説明により家族が自分を理解してくれたことに安堵した。うつ症状に対しても、本人、家族とも、薬物治療を希望せず家族内での対応の改善を中心とした経過観察を希望した。後日、幻視は存在するが攻撃性は減少した。

【考察】今回、右中大脳動脈閉塞後、幻視、自殺念慮を伴う抑うつ気分を認めた症例に対して、家族への説明と本人への受容的精神療法にて軽快した貴重な一例を経験した。